

12月11日 主日礼拝説教(要約) マルコ11:27~33

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

主イエスが神殿境内を歩いておられるとき、祭司長、律法学者、長老たちがやってきました。彼らはサンヘドリンと呼ばれていた最高法院のメンバーでした。彼らは主イエスに質問します、「何の権威で、このようなことをしているのか。だれが、そうする権威を与えたのか」(28節)。彼らは主イエスがラビとして正式に任職を受けていないこと、あるいは誰か有力なラビの弟子ではないことを問題にしたのでしょう。それなのに自分たちに相談もなく教え、自分たちが取り仕切っている神殿境内の秩序をひっくり返すような行動をしたりするのは、けしからんというのです。

主イエスは彼らの質問に対して逆に問い返して言われます、「では、一つ尋ねるから、それに答えなさい。・・・ヨハネの洗礼は天からのものだったか、それとも、人からのものだったか」(29-30節)。主イエスを問い正そうとしていた人々にとって、主イエスから逆に問い返されたことは驚きであったに違いありません。しかし、ここで主イエスはただ機知に富んだ反問をされたというのではなく、彼らが問題にした権威を、より本質的なところから問い直そうとしておられるのです。すなわち、本当の権威は天からのものでしかないこと、誰から教えを受けたとか、許可を得たかということは、第一義的なことではなく、権威の本質とは関わりがないことを示されるのです。

後に使徒パウロは、ガラテヤの信徒への手紙の冒頭で、自らのことを紹介してこう言いました。「人々からではなく、人を通してでもなく、イエス・キリストとキリストを死者の中から復活させた父である神によって使徒とされたパウロ」(1:1)。本当の権威とは、神に召され、神ご自身に力を授けられたところでのみ生じるのです。

洗礼者ヨハネの場合、彼は誰かの弟子ではなく、神殿の秩序の中においてでもなく、荒野において、神の審きの到来を告げ、人々に悔い改めを迫ったのでした。この荒野で呼ばれる預言者の声に、心ある多くの人々が引き寄せられ、悔い改めを促され、神の民としての新しい生き方を願って洗礼を受けたのでした。ヨハネは、ただ来るべき救い主を指し示し、救い主を受け入れる備えを人々にさせようとしたのです。ヨハネ自身、自分の権威を誇ったり、見せびらかせたりすることなく、来るべきお方をひたすら指し示し、来るべきお方の権威のもとにひれ伏したのでした。

このヨハネの洗礼は天から、すなわち神が定められたものであったのか、それとも、人間の思いで始められたことであったのか、と主イエスは問われます。問われた人々は、どう答えるべきか論じ合いましたが、たちまち行き詰まります。「『天からのものだ』と言えば『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と言うだろう。しかし、『人からのものだ』と言えば・・・」(31~32節)。彼らは多くの人たちがヨハネの説教に心打たれたことは知っていましたが、その教えを受け入れようとはしませんでした。しかし、だからといって、ヨハネは預言者などではなかったなどと言おうものなら、ヨハネに心引か

れていた民衆が何を言い出すか恐ろしかったのです。そこで彼らは「分からない」と答え、自分たちが問い始めた問いを打ち切ってしまったのです。

彼らの態度と判断は、数日後、主イエスの裁判をすることになるポンティオ・ピラトの態度と共通するものがあるのではないのでしょうか。主イエスの無罪を確信しつつ、群衆の声を恐れて、彼は主イエスを十字架に架けることを決めてしまいました。ローマ帝国から絶大な権力を委ねられ、ユダヤの民衆を侮蔑していた男でしたが、権威にこだわり権威を誇りながら、自分の思ったとおりの決断をすることができず、全く不自由にしか振舞えなかったのです。

主イエスは、預言者ヨハネを認めず、悔い改めて心開かない彼らには何もお答えになりません。しかし、そのこと自体、主イエスが何者にもよらず、神の御子として、神ご自身の力をもって、振舞っておられることを雄弁に物語っています。主イエスの御言葉には権威がありました。それは律法学者のようなものではなく、それにまさるものでした。人々を縛り付けたり、硬直させたり、威圧したりするものではなかったのです。誰もが神のもとに自分自身を取り戻すことのできる、慰めと解放の御言葉でした。

主イエスの権威は、何よりも罪を赦す権威でした。多くの病める人々をいやし、悲しむ人々を慰めながら、主イエスはそこで罪の赦しを告げ、私たちが絡みつく罪から解放しようとしてくださったのです。そのために、主イエスはエルサレムに入れ、十字架への道を歩んでおられるのです。私たちにからみつく罪の力を根こそぎにするために、私たちの罪をその身に引き受け、私たちが受けるべき審きを引き受けていかれるのです。そのように、主イエスの権威とは、罪びとを審き滅ぼす権威ではなく、ご自身のいのちをもって、私たちが新しく生まれ変わらせることのできる権威でした。

私たちはこのような主イエスのもとに招かれ、救われ、生かされているのです。このお方につながれていることにおいて私たちは自由なのです。このお方のもとに、たえず悔い改め、新しくされて歩むのです。もはや自分の権威を誇示することも、この世の権威により頼むこともいらないのです。たとえ面目を失うことがあっても、そこでうろたえることなく、自由でいられるのです。主イエスが生きて働いておられるからです。私たちの失敗や恥さえも益としてくださる神がおられるからです。私たちの罪を赦し、私たちが生かす権威をもっておられる主イエス・キリストを仰ぎ、ほめたたえて、私たちは軽やかに歩むことができます。